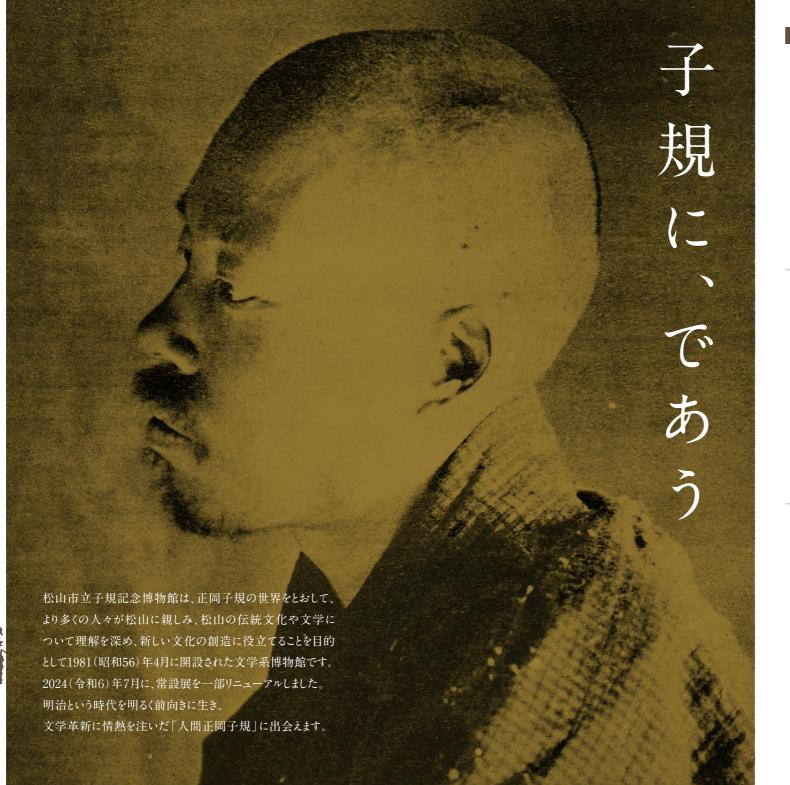
The Shiki Museum

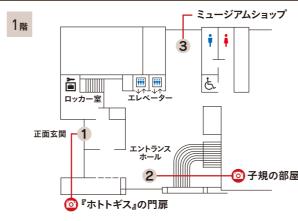


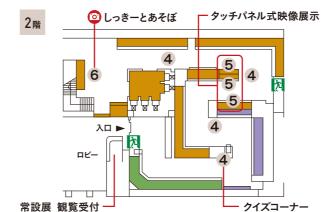


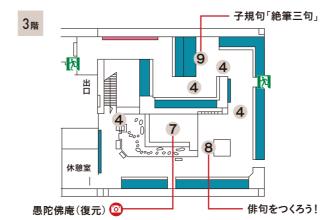
松山市立子規記念博物館



館内のご案内







◎ 写真撮影スポッ

子規博の楽しみ方

1 『ホトトギス』の門扉

俳誌『ホトトギス』のデザインを造形 したものです。閉館時にしか見ることが できない特別なスポットです。



2 子規の部屋

子規晩年の部屋をイメージした撮影ス ポットです。夏にはガラス越しに糸瓜 ご覧いただけます。



3 ミュージアムショップ

子規の関連書籍のほか、子規博オリ ナルグッズなどを多数取り揃えている す。ぜひお立ち寄りください。



4 クイズコーナー

タッチパネル式のクイズに挑戦しなが ら、楽しく展示を復習できます。(常設展 示室内に8か所設置)



5 タッチパネル式映像展示

- ・「子規の上京」
- ・「明治と現在の松山」
- ・「子規のペンネーム」

6 しっきーとあそぼ

AR機能付大型モニターで、当館のオリジ ナルキャラクター「しっきー」と一緒に記念 撮影などができます。



7 愚陀佛庵(復元)

子規が夏目漱石と同居した愚陀佛庵 (1階部分)を復元。庵の中に入り、写真 撮影ができます。



8 俳句をつくろう!

自作の俳句を短冊に印刷できます。来 館記念に、日付スタンプを押してお持ち 帰りください。



9 子規句「絶筆三句

ます。子規の筆跡に触れると、書かれた 文字が浮かび上がります。





開館時間/5月1日~10月31日午前9時~午後6時(入館は午後5時30分まで) 11月1日~4月30日午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日/火曜日(祝日の場合は翌日)

料 金/個人:500円/団体:400円(20人以上)※高校生以下無料 ※65歳以上の高齢者(証明書要提示)個人:250円/団体:200円 ※特別展・特別企画展観覧料は別に定めます。

駐 車 場/30分あたり100円

音声ガイドシステムの貸出し/1台:100円 日本語・英語・中国語・韓国語・台湾語(5か国対応) 主要な展示物約30点を音声でご案内します。(所要時間30分~40分程度)

インストラクターのお申込み/常設展示室のご案内をいたします。

◎定期ガイド/土曜日15:30~、日・祝日9:40~、集合場所2階 常設展示室入口 所要時間40分程度、料金無料(観覧料は必要です)

◎個別ガイド/展示解説は無料でお一人さまからご案内いたします。(事前に予約が必要) ご希望の方はお気軽に下記までご連絡ください。

※各種イベント開催時等には変更・休止する場合があります。



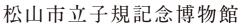












〒790-0857 愛媛県松山市道後公園 1-30

Tel.089-931-5566 Fax.089-934-3416

表紙:子規画「自画像」

導入 展示 子規の人間像

明治文学の革新に生きた正岡子規。 俳句革新・短歌革新・文章革新を成し遂げ、 文学を志す多くの若者を育てました。 また故郷・松山を愛し、家族や親族に支えられ、 34歳11か月の生涯を駆け抜けました。



子規著『俳諧大要』

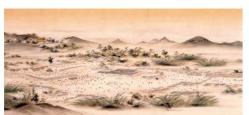


子規と母・八重

直 道後・松山の歴史

江戸時代の松山は、松平家の治世のもと、 道後温泉と豊かな文化的土壌に恵まれて栄えました。 佐幕派の松山藩は、幕末期に苦境に立たされましたが、 子規の祖父・大原観山らの活躍で戦火を免れ、 明治という新時代を迎えました。







Ⅱ 子規とその時代

子規は維新動乱のさなか、松山に生まれました。 自由民権運動の影響で政治家を志し、 上京後は夏目漱石ら友人と多感な学生生活を送ります。 俳句をはじめ文学の研究を深める一方、 大学中退を決意し日本新聞社に入社。 日清戦争に新聞記者として従軍しました。









子規の直筆資料を中心に、当館の名品を定期的に展示替えして紹介します。

選子規のめざした世界



また まつあん 愚陀佛庵(復元)

52日間同居し、俳人を指導する傍ら俳句革新の構想を練りました。

■俳句革新

1895(明治28)年発表の俳論「俳諧大要」で、 「俳句は文学の一部なり」と宣言。

俳句雑誌『ホトトギス』を拠点に、「新しい俳句」を発信し、 俳句を志す若者たちを育てました。



子規庵での句会の様子



『ほとゝぎす』創刊号





■短歌革新

1898(明治31)年発表の歌論「歌よみに与ふる書」で 旧来の歌壇を批判。日常語や外来語の使用を唱え、 『万葉集』を推奨。和歌の革新を訴えました。 同年から子規庵で「根岸短歌会」を開き、 後進を指導しました。



(ゆまに書房『日本』復刻版から転載)



■文章革新

1900(明治33)年、「叙事文」を発表し、ありのまま・ 見たままを明快に描写する写生文を提唱します。 同年、門人と文章の勉強会「山会」を開き、文章を鍛錬。 自身も「墨汁一滴」「病牀六尺」などの随筆をのこしました。

「山会」に集った門人たち





■ 病苦をのりこえて

東京・根岸の子規庵で6年余りの病床生活を送った子規。 脊椎カリエスの想像を絶する病苦と闘いながら、

子規は最期の時まで文学活動をあきらめませんでした。

草花の絵や「玩具帖」など、

晩年の絵画作品の数々は、

人生を懸命に生き抜いた

子規の境地を私たちに教えてくれます。





